

【概要】 ○原子力災害の実態と復興への取組を、国や世代を超えて継承・共有していくための情報発信拠点（アーカイブ）施設を、双葉町中野地区において整備する。平成32年度の運営開始を目指す。

【アーカイブ拠点施設概要】

《基本理念》 世界初の甚大な複合災害を経験した福島

地震・津波災害 + **原子力災害**

この災害からの復興拠点として
人々が集うシンボルとなる場

原子力災害と復興の記録や教訓の
未来への継承・世界との共有

福島にしかない原子力災害の
経験や教訓を活かす
防災・減災

福島に心を寄せる人々や団体と連携し、
地域コミュニティや文化・伝統の再生、
復興を担う人材の育成等による
復興の加速化への寄与

《事業活動方針》 ふくしまの経験、そこから得た教訓を後世に残すため、
共にこの災害を経験し、立ち向かった県民の力
“オール福島”の参加・協力で4つの事業を実践します。

原子力災害の教訓を伝え、
未来の安全へつなげる

- ・展示や資料を活用した原子力防災研修の実施
- ・他施設との連携、共同研修など、目的にあわせたメニューの展開

唯一無二の記録・記憶の蓄積と後世に伝えるための保存

- ・県民インタビューによる災害の記憶の収集、保存
- ・災害対応の記録(行政、企業、個人)の収集、保存

経験を活かす
人材の育成とネットワーク化

- ・原子力災害やその教訓(例：防災)に関する調査・研究
- ・上記人材の育成と専門分野別の調査研究の継続的な推進

4 研修
参加者が行動するきっかけとなる
原子力災害の経験に基づく
研修プログラムの提供

1 収集保存
関連資料の収集と保存、収録。
オーラルヒストリー等の
記憶も残す

原子力災害の
経験とそこから
得た教訓の発信

2 調査・研究
原子力災害の教訓を活かし
原子力防災などの充実・強化と
専門分野の人材の育成につなげる

3 展示・プレゼンテーション
福島県の「光と影」を伝え、
今、そしてこれからの福島を
プレゼンテーションする

リアルな展示と体験・プレゼン
による福島にしかないプログラ
ムの提供

- ・蓄積された資料、証言に基づく展示
- ・原子力防災の蓄積型、体験型の学習
- ・県民参加による生の声、想いの発信
- ・現在進行形である原子力災害の訴求

オール福島の参画協力で推進

企業・団体 県民 自治体

【スケジュール】



【平成29年度県予算】

- アーカイブ拠点施設整備事業【245,000千円】
施設及び展示について基本設計及び実施設計を行う
- アーカイブ拠点施設設置準備事業【108,234千円】
震災資料の収集や分類、シポジウムの開催や学習書籍の作成を行う

東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設

基本構想

【概要版】



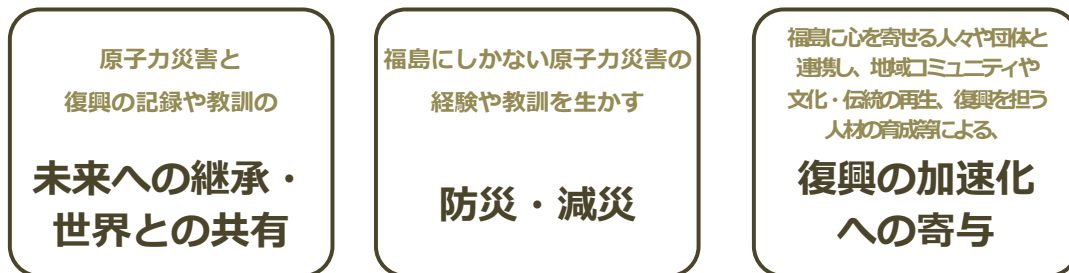
平成29年3月

福島県

1. 基本理念

世界初の甚大な複合災害の記録や教訓とそこから着実に復興する過程を収集・保存・研究し、風化させず後世に継承・発信し世界と共有することは、被災を経験した人々の共通の思いです。アーカイブ拠点施設では、特に福島だけが経験した原子力災害をしっかりと伝えることとし、以下の3つの基本理念を掲げます。

【基本理念】



2. アーカイブ拠点施設で伝えること(メッセージ)

基本理念を実現するためには、アーカイブ拠点施設から発信するメッセージが必要となります。アーカイブ拠点施設では、未来に向けて、国内外に向けて、2つのメッセージを発信していきます。

1. 福島の経験を踏まえた「危機意識」の喚起

福島の複合災害から、
想像を超える災害が起こりうることを知る。
この経験を忘れずに、
“備える”ことによって、安全・安心な社会を実現していこう。

2. 「新しいふくしま」の創造に向けて、 世界から寄せられた英知を生かし、果敢に挑戦することの大切さ

原子力災害からの復興に向けて福島に寄せられる世界の英知。
福島は、それらに感謝を伝え、果敢に挑戦し続けることで、
新たな価値を創造していく。
そんな福島とともに、希望に満ちた未来を切り拓いていこう。

3. アーカイブ拠点施設の果たす役割

基本理念を実現するために、アーカイブ拠点施設の果たすべき役割として、「みらい」へのゲートウェイとなることを掲げ、ゲートウェイとして5つの出会いを創出します。

～「みらい」へのゲートウェイ～

ここで創り出す5つの出会い

1. 「経験」・「教訓」との出会い

複合災害、特に原子力災害に関する福島の「経験」と、そこから得た「教訓」に出会う玄関口として、原発事故前の日常や失われたもの、事故直後からのこと、そして現在進行形の経験と、それらを通して得た「教訓」を蓄積・公開していきます。

2. 福島の経験を生かした資料や研究との出会い

複合災害の経験を伝えるための資料、実物の受け入れ窓口となるとともに、その資料を未永く保存していきます。また、資料単体からでは見えにくい、福島の経験や教訓を分かりやすく伝えるための、調査・研究にも出会える場とします。

3. 様々な活動、人との出会い

様々な人、団体をつなぎ、新たな活動などに生かす交流の玄関口として、経験や教訓を残し伝える方や、復興や福島イノベーション・コースト構想での新たな取組を実践する個人・企業・団体との出会いを創る場とします。

4. 「いま」と「これから」との出会い

福島のリアルな現状と、復興を進めるこれからの福島の展望に出会う玄関口として、最新情報、資料などを常に収集・発信します。さらに、最先端技術の実物や実演・プレゼンテーションにも出会える場とします。

5. 回遊の出発点としての「現地・現場」との出会い

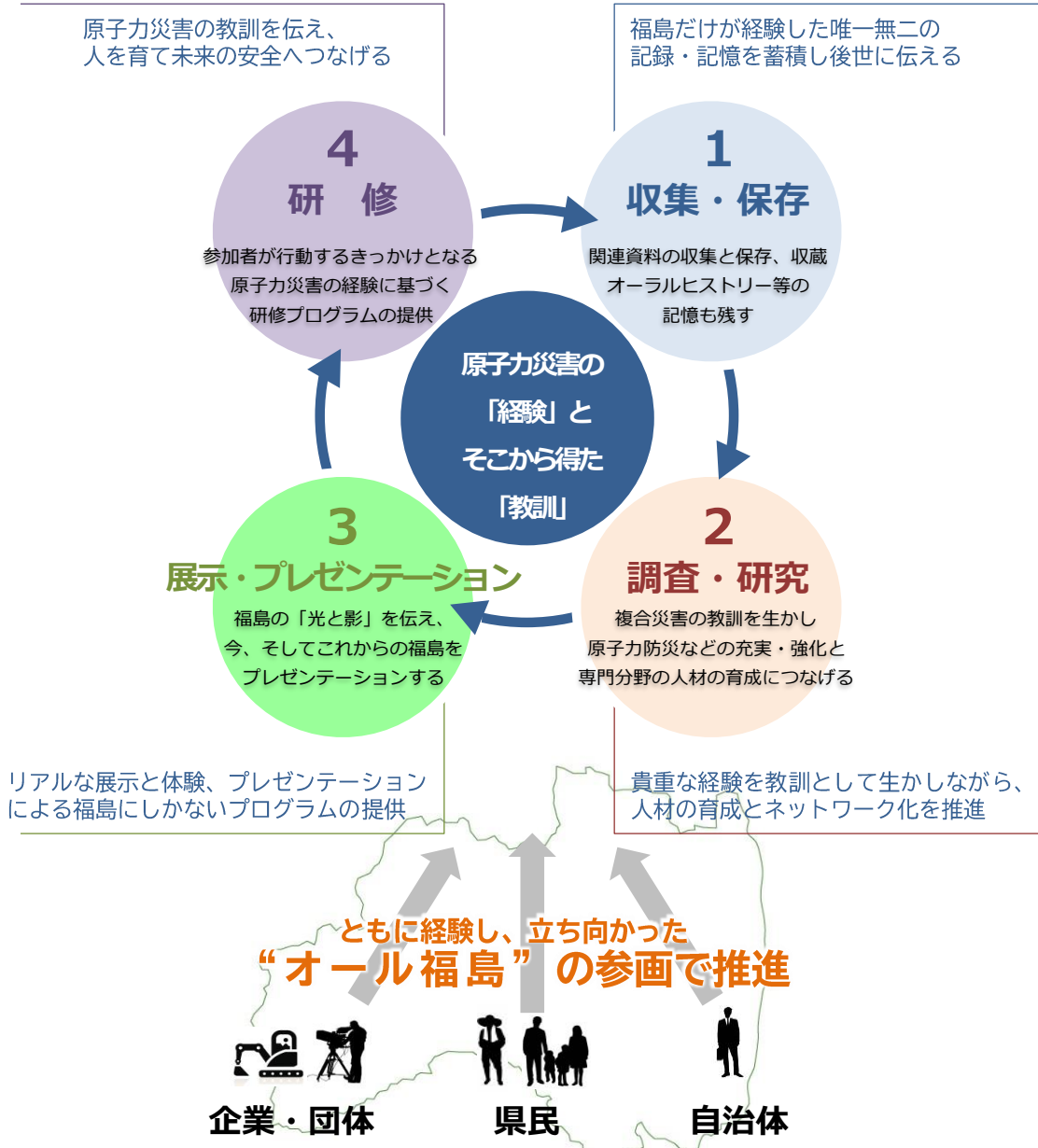
帰還を進める12市町村、新たな産業の集積を進める福島イノベーション・コースト構想の各拠点、そして復興を遂げる福島県下全域の「現場・現地」へと誘うゲートウェイとなります。アーカイブ拠点施設で出会った内容をより深く確認・実感できるツアーなど、現場・現地に実際に行く機会にも出会える場とします。

2020

東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、
国内外に向けて福島への“出会い”を用意して
復興の加速化へとつなげる

1. 事業・活動の方針

「みらい」へのゲートウェイとして、様々な出会いを創出するために、4つの「事業」と3つの「活動」を、“オール福島”の参画で推進していきます。



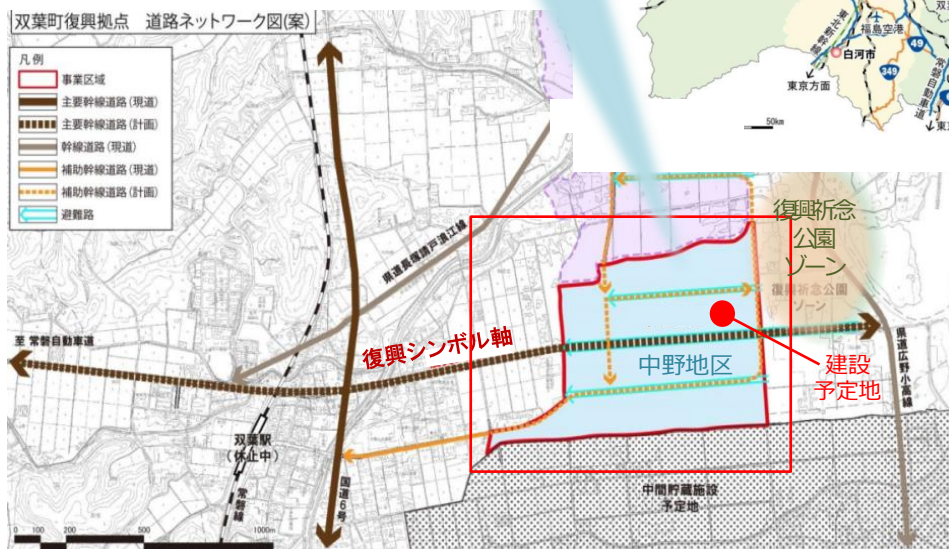
“オール福島”が参画して、4つの事業をより効果的にするための活動

人づくり	魅力づくり	ネットワークづくり
<ul style="list-style-type: none"> ・語り部活動・育成。 ・復興への取組や最新情報を発信する「福島の最前線プレゼンター」の組織化。 ・アーカイブ拠点施設の事業をサポートしてくれる「事業サポーター」の育成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アーカイブ拠点施設を核とした体験ツアーやイベント・研修など、ここにしかない「付加価値づくり」。 ・交通アクセスの構築や広報周知活動等による、行きたいと思う「吸引力」の向上。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「人」や「知」のネットワークによる、新たな事業づくりや既存事業の充実。 ・「隣」や「場」のネットワークによる、事業運営の効率化や県下全域への回遊の醸成。

2. 建物概要

建設予定地	敷地面積						
双葉郡双葉町大字中野地内	約35,000㎡						
施設規模(延床面積)	総事業費						
約5,200㎡	約55億円程度						
<p>■延床面積の内訳イメージ</p> <table border="1"> <tr> <td>展示・プレゼンテーション</td> <td>1,750㎡程度</td> </tr> <tr> <td>収集・保存</td> <td>980㎡程度</td> </tr> <tr> <td>共用等</td> <td>2,470㎡程度</td> </tr> </table>		展示・プレゼンテーション	1,750㎡程度	収集・保存	980㎡程度	共用等	2,470㎡程度
展示・プレゼンテーション	1,750㎡程度						
収集・保存	980㎡程度						
共用等	2,470㎡程度						

建設予定地



周辺環境:

常磐自動車道浪江ICから約12km、双葉IC(仮称・平成31年完成予定)から約7km、JR常磐線双葉駅(休止中)から約2km

アーカイブ拠点施設は、双葉町の中野地区という、地震、津波、それに続く原子力災害を実感できる場所に建設を予定しています。この地で、福島だけの経験や教訓、復興への取組、新たな挑戦を発信することで、今後も風化させることなく、着実に未来に残し継承することにつなげていきます。

【基本的な考え方】

アーカイブ拠点施設の展示では、その資料(財産)を“教訓”として伝え、今なお続いている福島復興の姿を記録しながら公開するという役割を果たし、未来へ向けたメッセージを発信していきます。

「人」が経験し、「人」が助け合いながら立ち向かってきた災害。その記録と記憶の展示に当たっては、「人」が「人」に伝えていくことも大切にします。

■ 展示ストーリーとイメージ

事故前後の「事実」、ふくしまの「経験」を“教訓”として発信し、

ストーリー



ここでの体験によって、この災害を「自分事」として捉え、日常生活を振り返ったときに、豊かさや幸せとは何か、今、そしてこれからの自分がすべきことはどんなことなのか、といった自分の価値観を振り返るような想いを抱いてもらうことを目指していきます。



【今後のスケジュール】

アーカイブ拠点施設の開館は、2020年7月の東京オリンピック・パラリンピックを視野に入れ、周辺の復興祈念公園や双葉町中野地区復興産業拠点等との調整を行いながら、整備を進めます。

年度	基幹	施設	展示	事業・運営			その他関連	
2017年度 (平成29)	設計等	施設基本設計・実施設計・建設工事	展示基本設計・実施設計・展示製作・工事・調整オペレーション	資料収集/保存	県民参加	運営	*復興祈念公園との調整 *双葉町中野地区復興産業拠点等との調整	
				資料収集体制の検討・収集	計画周知・参加の呼びかけ	運営組織や体制の検証		
2018年度 (平成30)	工事等			資料収集	資料仮保管・保存計画・デジタル化の検討	協働関係づくり		運営計画の具体化
				資料選定委員会	資料選定委員会	参加体制づくり		運営組織、人員の具体化 広報宣伝等
2019年度 (平成31)	工事等			資料移動	開館準備			
2020年度 (平成32)	準備			事業推進			7月～9月 東京オリンピック パラリンピック	

表紙のイラスト 「起き上がり小法師」

起き上がり小法師は、福島県（会津地方）の民芸品で、何度倒しても起き上がることから、「七転八起」の縁起物として知られ、今、まさに復興へ向けて起き上がろうとしている福島のシンボルとして注目されています。アーカイブ拠点施設で伝えることのひとつに、挑戦するスピリッツ、失敗しても何度も起き上がる、ということがあります。この想いを国内外に、後世に伝えることを目標に、そのイメージとしてビジュアル化しました。